

きた報告者はほとんど見当たらなかった印象がある。自分たちの理論の拡張に元のモデルとの関係を上手く説明が加わればより研究価値が上がると感じた。こうしたインドの研究者の国際的な活躍と、日本との積極的な交流を今後も期待したい。（大泉 嶺 記）

## インドネシアの人口統計および住民登録制度に関する調査研究

厚生労働科学研究費補助金（地球規模保健課題解決推進のための行政施策に関する研究事業）「東アジア、ASEAN 諸国における UHC に資する人口統計システムの整備・改善に関する総合的研究」（研究代表者：鈴木透）の一環として、国際関係部の中川雅貴が2018年12月3日から7日にかけてインドネシアのジャカルタに滞在し、インドネシアの人口統計および住民登録制度に関する調査研究を行った。滞在期間中は、中央統計庁や保健省といった政府機関ならびに国立インドネシア大学人口研究所において、とくに全国レベルでの人口動態統計システムの現状と今後の展望に関するヒアリング調査と資料収集を行った。中央統計庁では、2015年に実施されたセンサス間人口調査の結果に基づいて2018年8月に公表された新たな将来人口推計（全34州別推計を含む）の概要と手法についての説明も受けることができた。

国立インドネシア大学人口研究所では、全国レベルでの人口動態統計が未整備な状況における人口動態のモニタリングおよび分析手法についての意見交換と情報収集を行った。とくに近年、中央統計庁にも採用されている *Demographic and Health Survey* (DHS) を用いて推計される合計出生率 (TFR) が過大推計である可能性が内外の研究者から指摘されていること、死亡については乳児死亡率 (IMR) や妊産婦死亡率 (MMR) といった従来関心の高かった指標に加えて、中高年以上の死亡率を正確に計測し、見通すことの重要性が増していることなどについて意見交換を行った。また、同研究所では、1990年代初頭より継続的に実施されている世帯縦断調査である *Indonesia Family Life Survey* (IFLS) を用いて筆者が分析を進めている世代間支援関係と若年人口移動の関連についての研究発表を行う機会が与えられ、貴重なコメントと助言を得ることができた。（中川雅貴 記）

## 第3回出生データベースシンポジウム (3rd Human Fertility Database Symposium) における研究報告

出生データベースプロジェクト (Human Fertility Database project, 以下, HFD) は、先進国における出生力変動のパターンと要因を解明することを目的として、国際比較（及び地域比較）が可能な質の高いデータ（コーホートと期間出生に関する出生順位別出生データ）を収集しようとするものである。このプロジェクトは、人口学研究における世界二大巨頭といえるドイツ・マックスプランク研究所とオーストリア・ウィーン人口研究所によって、2007年に開始されており、既に10年以上の歴史がある。この間、当研究所の金子隆一（前副所長）も HFD の構築に参加しており、当研究所も積極的に国際的な知の蓄積の貢献に協力してきた。その HFD の成果報告のためのシンポジウムが2018年12月5日～12月7日の日程でオーストリア・ウィーンにおいて開催された。HFD プロジェクトの成果報告のためのシンポジウムとされているが、HFD 自体が出生力変動のパターンと要因の解明という人口学研究において普遍的といえるテーマの探求を目的としており、これまで2011年ドイツ・ロストック、2016年ドイツ・ベルリンで開催されてきたシンポジウムにおいて、HFD を用いた研究成果のみならずマクロ・出生データを用いる先進的な研究成果の報告が行われてきた。3回目の開催